

## 平成 28 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同利用型」の個人による研究 研究報告書

平成 29 年 4 月 30 日現在

研究課題名	伊犁通商条約（1851 年）から見たロシア帝国の対清外交	
申請者	氏名	所属機関・職
	塩谷 哲史	筑波大学人文社会系・助教

## 研究成果の概要

本研究は、中国ではロシアが英仏との覇権争いに後れをとるまいとして清朝に押しつけた不平等条約、ロシアでは民間で発達した新疆＝西シベリア貿易の両国政府による公認、日本では清朝がキャフタ条約の延長線上で自発的に締結した条約として評価が分かれている、伊犁通商条約の締結交渉過程を明らかにすることにあつた。とりわけ 1851 年 7 月にイリで行われた条約締結交渉の経過は、これまで清朝側史料にもとづいて再構成されてきたが、ロシア側史料からの考察が可能となり、ロシア側の交渉意図についても新たな知見が得られてきた。

本年度は、センター滞在中に、レンセン・コレクションを始めとする北大図書館およびセンター所蔵の史資料を閲覧、一部を複写した。現在これらの収集史料に関して、すでにロシア国民図書館で筆写を続けている文書群と合わせた検討を継続している。

本研究の成果の一部として、2016 年度内陸アジア史学会大会において「伊犁通商条約（1851 年）の締結過程から見たロシア帝国の対清外交」と題する報告を行い、その後同学会誌に論文を投稿中である。また、2016 年 12 月に東京大学東洋文化研究所で行われた国際ワークショップ “Towards a transcultural history of diplomacy: A Core-to-Core Global History Collaborative workshop” においても、“Reconsideration of the Treaty of Kulja (1851): Imperial Russian Diplomacy in a Eurasian Context” と題する報告を行い、同条約を当時の世界史の文脈に置いて評価する試みを行った。

## 主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）

図書

小松久男編著『テュルクを知るための 61 章』明石書店、116-119、125-127、146-149 頁。

学会発表

塩谷哲史「伊犁通商条約（1851 年）の締結過程から見たロシア帝国の対清外交」2016 年度内陸アジア史学会大会、駒澤大学、2016 年 11 月 5 日。

## 当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

とくになし

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。